

閲覧ニュース

21号

1979. 1.

☆ 後期試験に備えて

1) 開館時間について

平 日 ; 9時から6時まで (1/8～2/1)

土 曜 ; 9時から1時まで

※但し、1/13 (土)、1/20 (土) は、3時まで開館。

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期には、一部特定の図書に利用が集中します。このため、予約の多いものに限り、オーバーナイト貸出、三日貸出等の措置をとりますので御承知下さい。

3) その他の注意事項 !! !! !!

★ カバン類は必ずロッカーに入れてから入館しましょう。

★ 書架へ入る際の持込みは禁止です。

★ 館内での喫煙、飲食、また私語は固く禁じています。

以上を守って下さい。

春休み中の貸出について

後期試験が終了しますと春休みに入ります。例年、春の長期貸出の希望がありますが、①春休み中、当館は平常開館していること、②二年次への進級では各学部分散してしまつて図書の返却にトラブルが多い、等の理由により長期の貸出はしておりません。平常どおりの貸出になりますので御了承下さい。

＜参考図書コーナー＞

の一部模様換え

従来の参考図書コーナーが手狭になったことと、また地震対策も考慮に入れて、スペースを多少拡張しました。この為、美術全集などの大型本も揃え、皆さんが閲覧しやすいように配置がえしましたので、どうぞご利用下さい。

百科事典、辞典、人名録、住所録、便覧、ハンドブック、大型地図などもすべてこのコーナーにあります。

*** 原稿募集のお知らせ ***

当館では、閲覧席に投書箱を用意して皆様からの御意見や御希望を募り、建設的意見や提案などは図書館運営に反映させたいと考えております。年々、投書数が少なくなってきており残念です。匿名、実名どちらでも結構ですので広く皆様からの御意見をお待ちしています。また、閲覧ニュースに書いてみたいことなどありましたら係までおいで下さい。原稿用紙はこちらで用意してあります。

「詩と私」

岡野安洋（独語）

詩というものは、やはり若い時、特に10代ぐらいから少しづつでも親しんでいないと、20才をこしてからではなかなか自分の感情に受け入れるということは難しいようです。理屈では理解できても、心が響かないとでも言ったら良いのでしょうか。幸なことに私は友人にとっても詩の好きなのがいて、何かと話しをしているうちに詩と接する機会を持つようになりました。高校時代だったでしょうか。日本の詩人では立原道造、中原中也とまあ今ではお決まりのコースとも言えるかもしれませんが、15年前では中原中也の詩集と言ってもすぐ入手できたのは、河上徹太郎編の角川文庫版ぐらいではなかったでしょうか。解説・伝記の類いは、今でこそ多数出ていますが、当時は大岡昇平のものが高校生の私の手の届くところにあっただけでした。全集が発売された時の歓びは今でもよく思い出され、そのころの私にしては大金と言える980円を払いつつ5冊買いそろえ、今でも私の部屋の本棚にどっかりと座っています。ただし近頃では手に取ってみることも稀ですが。

中也はやはりよほど好きだったのでしょうか、例の友人とわざわざ中也の生家を山口まで尋ねて記念写真を撮って来たくらいです。しかし大学に入学してドイツ文学を学ぶようになると、次第に中也とも離れてしまいました。それでも10代で多少なりとも詩に親しんだことで、外国の詩人の詩を理屈ぬきで共感できる部分があったことは幸せでした。ただ、なにせ外国語で詩を読むのですから、ストレートに理解できないものどかしさもありました。

さて、これまでたびたび話に出て来た私の友人ですが、つい先頃自分の詩集を出しました。表題は「至近距離への船出」（芥川潔）というもので16編の詩からなっています。今まで詩を余り読んだことのない人に、入門用として勧

めるには気がひけますが、多少詩が好きで、自分でも少しは創作している人にとっては、一つの方向を見るつもりで読んでみて下さい。私自身、書く時は散文以外に書けない者なのですが、詩集内のⅢ、特に「山陰1～3」は一緒に旅行した共同体験がオーバーラップされているようで、とても他人の詩とは思えなくなってしまう。それでもやはり、自分で詩が書けたら、つい思ってしまう。それも10代のうちにたくさんの詩を読み、啓発されて自分で書くことが一番なのでしょう。そういう機会を逸してしまった私は、ひたすら他人の詩の中に、自分の共感できる部分を捜している次第です。

（尚、芥川潔著「至近距離への船出」は教養部図書館に寄贈してありますので、興味のある方はどうぞ。）

付記：推薦図書について

学生諸君の答案などを見ていると、よく全く意味の分らない文にぶつかることがあります。文章を書く基本である意味の伝達が十分に行なわれていないようです。丸谷オ一の「文章読本」は文を書くための基礎に触れた現代的な文章論といえるでしょう。次に谷崎潤一郎の「吉野葛」と古井由吉の「杳子」は私の好きな文です。基本を理解したらそれを実践している好例を多数読むことです。その上で「言語にとって美とは何か」という問題を考えてみて、良い辞典を用いて正しい文章を書くことを心掛けることが大切であると思います。

＜推薦図書＞

丸谷 オ一著 「文章読本」 中央公論社
(816/Ma59)

谷崎潤一郎著 「吉野葛」 中央公論社
(谷崎潤一郎全集第12巻 918.68/Ta88/V.12)

古井 由吉著 「杳子」 中央公論社
(913.6/F93)

吉本 隆明著 「言語にとって美とは何か」
(勁草書房 914.6/Y91g/V.1～V.2)

新村 出編 「広辞苑」 岩波書店
(R 813.1/Sh64)

新 書 案 内 (1978. 7 ~ 12 月 分)

< 岩 波 新 書 >		木越邦彦著	№ 496
「人間ゲート」小栗浩著	№ 黄版 46	「愛の幻想—対人病理の精神分析—」	
「紅萌ゆる—昭和初年の青春—」		福島章著	№ 497
土屋祝郎著	№ 黄版 47	「火山灰に生きる—桜島の人間記録—」	
「宇宙空間への招待」西田篤弘著	№ 黄版 48	市坪弘著	№ 498
「人間—過去・現在・未来—」上巻		「バルザック—天才と俗物の間—」	
L・マンフォード著 久野収訳	№ 黄版 49	霧生和夫著	№ 499
「ある盲学校教師の三十年」		「生命を把えなおす—生きている状態とは何か—」清水博著	№ 503
鈴木栄助著	№ 黄版 51	「都市のルネサンス—イタリア建築の現在—」陣内秀信著	№ 504
「核先制攻撃症候群—ミサイル設計技師の告発—」		「アユの生態」小山長雄著	№ 505
R. C. オルドリッジ著 服部学訳	№ 黄版 52	「天武朝」北山茂夫著	№ 506
「日本語の文法を考える」大野晋著	№ 黄版 53	「日本のビール」稲垣眞美著	№ 507
「読書こぼればなし—月—話—」		「連句入門—芭蕉の俳諧に即して—」	
淮陰生著	№ 黄版 54	東明雅著	№ 508
「民」の論理、「軍」の論理 小田実著	№ 黄版 55	「モラリスト—生き続ける人間学—」	
「壬申の内乱」北山茂夫著	№ 黄版 56	竹田篤司著	№ 509
「日本速記事始—田鎖綱紀の生涯—」		「人形の国のガリバーさん—チェコの人形劇に学んで—」加藤暁子著	№ 510
福岡隆著	№ 黄版 57	「砂漠の狩人—人類始源の姿を求めて—」田中二郎著	№ 511
「腸内細菌の話」光岡知足著	№ 黄版 58	「日本文学と気象」高橋和夫著	№ 512
「オーギュスト・コント—社会学とは何か—」清水幾太郎著	№ 黄版 59	「そばや今昔」堀田平七郎著	№ 513
「自由民主主義は生き残れるか」		「象のきた道」亀井節夫著	№ 514
C. B. マクファーソン著 田口富久治訳	№ 黄版 60	「少年期の心—精神療法を通してみた影—」山中康裕著	№ 515
「宗教弾圧を語る」小池健治等編	№ 黄版 61	「フランス 1920 年代—状況と文学—」	
「日本の婦人問題」村上信彦著	№ 黄版 62	山口俊章著	№ 516
「相対性理論入門」内山龍雄著	№ 黄版 63	「奥アマゾン探検記」(上)向一陽著	№ 517
「説教の歴史—仏教と話芸—」		「刑史の社会史—中世ヨーロッパの庶民生活—」阿部謹也著	№ 518
関山和夫著	№ 黄版 64	「中学二年以後」望月一宏著	№ 522
「アクセス権とは何か—マス・メディアと言論の自由—」堀部政男著	№ 黄版 65	< 講 談 社 現 代 新 書 >	
「ソ連における少数意見」		「家族の文化構造」川本彰著	№ 507
ロイ・メドヴェージェフ著 佐藤紘毅訳	№ 黄版 66		
< 中 公 新 書 >			
「年代を測る—放射性炭素法—」			

